

学びの成果とセルフエスティームに関する研究 — 学生へのアンケート調査より —

宮 嶋 淳¹⁾

Study on Student Achievements and Self-esteem — From analysis of questionnaire survey results —

Jun MIYAJIMA

本研究は、学生の興味・関心並びに生活経験に即した、如何なる学びを高等教育機関が提供することによって、学生一人ひとりがセルフエスティームを向上させ、自己実現させていけるのか、その焦点を明らかにすることを目的とした。

調査の結果から、今日の学生たちは自認するセルフエスティームは高い一方、社会的セルフエスティームにバラツキがあることが明らかになった。したがって、学生たちの自意識を尊重しつつ、社会的セルフエスティームを向上させられるような、社会人基礎力の各項目を構造的に理解し、納得した上で獲得に迎えるよう教育的配慮を工夫していくことが求められることが示唆された。

キーワード：学生、セルフエスティーム、教育的配慮

はじめに

近年の学生は「エコ世代」と言われ、その特徴が「ほどほどに学び、ほどほどに遊ぶ」といわれている。その一方で、社会の求めは「社会人基礎力」や「一歩踏み出す力」など主体性や創造性、それに加えて公共性や公益性にも言及されている。

学生教育に関する研究は、高校から大学へ進学した際のギャップを埋め、高等教育の場に学生らを順応させていくための初年次教育に関する研究や変化した学生像に即した教材開発、さらには社会の利便性を受け止めたICT活用やアクティブラーニングなど方法論あるいは教授法など多角的に探求されてきた(橋本, 2019)。学生の生活や学習経験に着目し、生活支援と学生支援を結びつけ、如何なる支援が学生一人ひとりの学習力の向上につながるのかを全国の社会福祉系大学で行い、社会福祉系学生像と社会福祉系学生に求められる将来像とを比較し、両者の乖離の背景並びに本質について探求した研究がある(宮嶋, 2008)。また、学生の本質として「自己肯定

感の低さ」が注目される中、アンケート調査によって「あきらめ・ムリ・一歩を踏み出さない」学生の、学生生活上のニーズを踏まえ、有効な教育支援のための焦点を明らかにしようとした研究もある(宮嶋ら, 2017)。

本研究では、今日の学生らが大学在学中に、如何に成長し自己肯定感を高め、学びの成果を将来に活かしていけるのかを、上記の研究成果を踏まえ、他大学・他学部・他学科のデータを蓄積し、普遍的側面あるいは特徴的な傾向を探索し、相互比較することで、学生の志向性や学習への準備状況並びに自己肯定感からみた学生の傾向を明らかにする。データから明らかにされた学生の傾向に即した、大学教育の提供の仕方、工夫すべき焦点を報告する。

I. 先行研究の到達点

前記の宮嶋(2008)の研究では、社会福祉系学生の生活体験・学習活動・生活に関する実態を量的調査により明らかにし、その実態から考察される社会

1) 人間福祉学部人間福祉学科

福祉系学生像に関する仮説を導いている。その上で、仮説から描き出される社会福祉系学生像と社会福祉系学生に求められる固有の将来像とを比較し、両者の乖離の背景並びに本質について探求している。その結果、社会福祉系学生の支援の課題として、①大学類型ごとの評価にかかる客観化、②「初年次教育」の体系的な取り組みの必要性、③「初年次教育」の体制並びに教材等方法論の開発、④社会福祉系専門職教育としての実践力の育成方法の再構築が示唆された。また宮嶋ら(2017)は、福祉系大学A学部の学生の自己肯定感と日常生活における活動の現状を把握し、学生たちが「夢を描き、一步を踏み出せる」素養を養成するため、如何なる教育的配慮が必要なのか、その課題を明らかに示した。課題となる教育的配慮については、高儀ら(2015)が行った調査研究のデザインが参照され、近藤(2013)の尺度が用いられている。その結論をみると、A学部の学生像は、社会的自尊感情(SOSE)並びに基本的自尊感情(BASE)について、①両方が高いタイプの学生、②その真逆の学生に二分され、両タイプの学生の特性を活かし、学習面や社会活動への参画の動機付け、より高所を目標とする意欲を引き出すような教育的配慮が必要であると結論づけられていた。

自尊感情や自己肯定感が行動を牽引し、成功体験が動機付けになり、意欲を維持させることにつながる。そうした自尊感情や自己肯定感、自己有用感など類似の用語がわが国では、整理されずに来た歴史がある(内田・上埜, 2010)。歴史を辿れば、自己肯定感とは「自分を肯定する感情」であり、自己効力感とは「自分が行うことは効力があると信じられる感情」で、後者はA・バンデューラが提唱した。自己効力感が高い学生は、目標を達成する確率が高く、自己効力感が低い学生の目標達成率は低くなる傾向にあると言われる(A・バンデューラ, 1977)。A・バンデューラは、自己効力感の先行要因として、①達成経験: 自分自身で目標を達成した経験、②代理経験: 自分以外の誰かの目標達成を観察した経験、③言語的説得: 自分にスキルや能力があることを言語的に説明・説得されること、④生理的情緒の高揚: モチベーションがアップする生理現象、⑤想像的体験: 自分自身で目標達成することを想像すること、を指摘している。

宮嶋ら(2002)は、介護福祉系学生を調査対象と

し、学生の自己教育力の研究を行っている。自己教育力とは、新たな変化や課題に対処するために必要な能力であり、宮嶋らは先行研究と調査結果から、①目標意欲、②プライド、③自己肯定、④行動統制喪失、⑤内省、⑥感情統制、⑦発展意欲喪失、⑧目標喪失、の8つの因子を導いている。多久島ら(2006)は、自己教育力の側面を①成長・発展への志向、②自己の対象化と統制、③学習の技能と基盤、④自信・プライド・安定性、の4つとし、自ら学び自己を成長させていく力としている。また看護学生に関する同様な調査として遠藤ら(2011)の研究成果がある。これらの観点を踏まえ、学生一人一人に向き合うことで、学生の自己成長を導くことが出来、教育効果を高められると考えられてきた。

西野(2013)は、子どもたちの成長をサポートする概念として、感情コンピテンスを取り上げ、一人一人の子どもの感情を引き出すような社会的環境的相互作用が、自己肯定感(self-efficacy)に影響を与えたとした。子どもの成長がコンピテンス、すなわち「力量」と解釈され、力量は「相互作用」により伸びると示唆されているのである。このことを教育実践上の研究として示した宮崎(2015)は、総合学習としての道徳の活用例を詳細に示し、子どもの成長を可視化している。

国立教育政策研究所(2015)は、自尊感情とは「自己に対して肯定的な評価を抱いている状態」を指す“Self-esteem”の日本語訳といい、子どもたちが規範意識を持つことの重要性を身につけることを教育するとき、自己有用感の育成と表現する方が妥当だと示している。その理由として、「人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という『自己有用感』は、自分と他者(集団や社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」だからだとしている。つまり、自尊感情は自分に対する自己評価であり、自己有用感是他者や社会との関係の中で認知される評価だとされている。

山本(2015)は、セルフエスティームが人の行動を規定するので、それを育む教育に取り組むことは、健やかな心や学力を育む基礎となり、教育目標の実現に寄与するとした。つまり、セルフエスティームは、学習への意欲や学業成績に大きく関係し、自尊の欲求や他からの承認の欲求を満たし、自己実現に

向かう要因だという。そして、セルフエスティームを向上させる条件として、①努力やチャレンジが可能、②①が自己に肯定的な結果をもたらす、③自己決定意識、④人間的な交流、を構造的に示している。セルフエスティームは、「自己肯定感、自尊心、自尊感情、自己評価、自己有用感、自己重要感」と訳される。この言葉ひとつひとつを厳密に使い分けることもできるが、セルフエスティーム協会では、「自己肯定感」という用語で広くとらえられている。大人になってから「自己肯定感」を高めるには、「自己肯定感」を高める適切なトレーニングが必要であり、日本セルフエスティーム普及協会（2019）では「自己肯定感の5つの構成要素」で説明している。すなわち、①自分を認める、②自分を受け入れる、③自分を大切にすること、④自分に価値を感じる、⑤自分を信頼すること、である。

セルフエスティームの研究並びに測定を効果的にを行い、教育に反映させようという試みは、幾重にも積み重ねられてきた。その結果、セルフエスティームは、訳語の問題から個人の基礎をなす問題へ、そして他者との相互作用、あるいは相関の問題へと進展した。そして今、自律的並びに他律的セルフエスティームを同時に測定し、社会生活上の自己実現や成長、人間関係と関連づけ、効果的に向上させる教育のあり方が模索され、実践研究されてきている（横嶋ほか、2019）。よって、以下、セルフエスティーム（= Self-esteem, SE と略す。）という用語で統一する。

II. 目的と仮説

目的

学生の興味・関心並びに生活経験に即した、如何

なる学びを提供することによって、学生一人ひとりが自己肯定感を向上させ、自己実現させていけるのか、その焦点を明らかにする。

対象者及び方法

本研究の対象は、四年制大学並びに短期大学の学生延べ600人程度であり、前回調査=2016年と今回調査=2019年4月～7月に、大学の教室等でアンケート用紙を配布し、その場で記入・回収する集合調査として実施した。調査の項目は、どちらの調査も前記の近藤（2013）の尺度 = SOBA-set 尺度でSEを測定している。

仮説

本研究では、調査対象が志望した高等教育機関の形態並びに課程及び得られる資格を類型化し、総合的に考察するため、それらを総称して「大学タイプ」と称する。本研究では、大学タイプごとで、学生個々の生活歴、学習歴や進学希望先など、学生の実態（学生像）が異なるだろう。学生像の違いは、社会的自尊感情（SOSE）並びに基本的自尊感情（BASE）に有意な差として検出されるのではないかと考えた。したがって、大学タイプごとで、異なる学生の特徴があり、それに配慮した、学習面や社会活動への参画の動機付け、より高所を目標とする意欲を引き出すような教育的配慮が必要であろうと想定した。

倫理的配慮

本調査・研究の実施にあたり、中部学院大学・同短期大学部倫理委員会の審査（受領番号：E19-0002）を経ている。

III. 調査結果

2016年度調査では、すべて同一大学・同一学部生に対する調査であり、この時点で1年生であった学

表1 調査対象者と回答率

2016年調査	対象者数	回答者数	回答率
グループ1	60人	50人	83.30%
グループ2	80人	50人	62.50%
グループ3	83人	59人	71.10%
グループ4	115人	83人	72.20%
小計	338人	242人	71.60%

2019年調査	対象者数	回答者数	回答率
グループ5	80人	65人	81.30%
グループ6	50人	39人	78%
グループ7	65人	40人	61.50%
グループ8	100人	86人	86%
グループ9	80人	78人	97.50%
小計	375人	308人	82.10%
合計	713人	550人	77.10%

備考：グループ1～4 = 私学・社会福祉系。グループ5 = 私学・看護。グループ7・8 = 私学・短大。

グループ9 = 国立・看護。グループ1とグループ6の学生は、同一。2016年度入学。

表2 2019年調査の回答者の基本属性

グループ		G 5		G 6		G 7		G 8		G 9		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
性別	男性	13	20.0%	13	33.3%	13	32.5%	1	1.2%	2	4.8%	42	15.4%
	女性	52	80.0%	24	61.5%	27	67.5%	85	98.8%	40	95.2%	228	83.8%
	その他	0	.0%	1	2.6%	0	.0%	0	.0%	0	.0%	1	.4%
	N A	0	.0%	1	2.6%	0	.0%	0	.0%	0	.0%	1	.4%
	合計	65	100.0%	39	100.0%	40	100.0%	86	100.0%	42	100.0%	272	100.0%
志望時期	高校1年	2	3.1%	0	.0%	2	5.0%	6	7.0%	8	19.0%	18	6.6%
	高校2年	5	7.7%	5	12.8%	11	27.5%	23	26.7%	9	21.4%	53	19.5%
	高3前期	28	43.1%	21	53.8%	17	42.5%	28	32.6%	5	11.9%	99	36.4%
	高3後期	27	41.5%	10	25.6%	9	22.5%	14	16.3%	17	40.5%	77	28.3%
	その他	3	4.6%	3	7.7%	1	2.5%	15	17.4%	3	7.1%	25	9.2%
	合計	65	100.0%	39	100.0%	40	100.0%	86	100.0%	42	100.0%	272	100.0%
志望順位	第1位	25	38.5%	29	74.4%	33	82.5%	75	87.2%	26	61.9%	188	69.1%
	第2位	12	18.5%	3	7.7%	4	10.0%	6	7.0%	11	26.2%	36	13.2%
	第3位	3	4.6%	2	5.1%	0	.0%	1	1.2%	4	9.5%	10	3.7%
	第4位	16	24.6%	2	5.1%	1	2.5%	0	.0%	1	2.4%	20	7.4%
	第5位	9	13.8%	3	7.7%	2	5.0%	4	4.7%	0	.0%	18	6.6%
	合計	65	100.0%	39	100.0%	40	100.0%	86	100.0%	42	100.0%	272	100.0%
志望動機	関心のある分野	45	59.2%	26	59.1%	18	43.9%	72	60.0%	33	54.1%	194	56.9%
	なんとなく	12	15.8%	4	9.1%	8	19.5%	5	4.2%	4	6.6%	33	9.7%
	この学校に	1	1.3%	1	2.3%	3	7.3%	3	2.5%	1	1.6%	9	2.6%
	就職に有利	0	.0%	1	2.3%	1	2.4%	10	8.3%	2	3.3%	14	4.1%
	サークル	1	1.3%	0	.1%	0	.6%	0	.3%	0	.2%	0	.1%
	勧められて	11	14.5%	9	20.5%	8	19.5%	21	17.5%	13	21.3%	62	18.2%
	その他	6	7.9%	3	6.8%	3	7.3%	9	7.5%	8	13.1%	29	8.5%
	合計	76	100.0%	44	100.0%	41	100.0%	120	100.0%	61	100.0%	341	100.0%

生が、3年後の2019年度において4年生となり、グループ6として調査に回答している。2016年度は、いわゆる「ゆとり世代」後であり、「ゆとり教育」後の教育を受けている学生である。

表2中の上段で、「G○」という表記は、表1でいう「グループ○」に対応する。2019年度調査における回答者は、女性が多く、高校3年生の前期に在籍する大学タイプを選択し、同大学タイプの志望順位は高い傾向にある。また、同大学タイプを選んだ理由は、「関心のある分野」という回答が最も高く、次いで「勧められて」となっている。

回答者のSE類型は、近藤によるSEタイプでいう「SBタイプ」と「sBタイプ」で9割を超えた(表3)。グループ間のSEタイプの等質性、あるいは異質性を確認してみると、表4が得られた。

表3 グループごとのSEタイプ

		S B	s B	S b	s b	N A	計
G1	人数	30人	18人	1人	1人	0	50人
	%	60.00%	36.00%	2.00%	2.00%	0.00%	100.00%
G2	人数	20人	27人	3人	0	0	50人
	%	40.00%	54.00%	6.00%	0.00%	0.00%	100.00%
G3	人数	21人	35人	2人	1人	0	59人
	%	35.60%	59.30%	3.40%	1.70%	0.00%	100.00%
G4	人数	42人	41人	0	0	0	83人
	%	50.60%	49.40%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
G5	人数	56人	4人	2人	2人	1人	65人
	%	86.20%	6.20%	3.10%	3.10%	1.50%	100.00%
G6	人数	34人	4人	0	0	1人	39人
	%	87.20%	10.30%	0.00%	0.00%	2.60%	100.00%
G7	人数	34人	1人	3人	1人	1人	40人
	%	85.00%	2.50%	7.50%	2.50%	2.50%	100.00%
G8	人数	76人	3人	6人	1人	0	86人
	%	88.40%	3.50%	7.00%	1.20%	0.00%	100.00%
G9	人数	65人	4人	8人	1人	0	78人
	%	83.30%	5.10%	10.30%	1.30%	0.00%	100.00%
計	人数	378人	137人	25人	7人	3人	550人
	%	68.70%	24.90%	4.50%	1.30%	0.50%	100.00%

表4 SE 類型とグループ間等質性

Group	度数	類型			基本的側面		社会的側面		
		1	2	3	1	2	1	2	3
1	50		1.46	1.46	12.66		14.96	14.96	
2	50			1.66	12.60		15.00	15.00	
3	59			1.71	12.24		14.97	14.97	
4	83		1.49	1.49	12.22		14.61		
5	65	1.20	1.20			15.26	15.62	15.62	
6	39	1.08				16.21			17.23
7	40	1.23	1.23			16.10	16.08	16.08	16.08
8	86	1.21	1.21			15.57		16.56	16.56
9	78	1.29	1.29			15.96	15.53	15.53	
合計	550								

備考: $\alpha = 0.05$ のサブグループ

グループ間における SOBA-set 類型の影響を分析するために分散分析を行った(表4)。その結果、 $F(8, 541) = 7.092$ 、 $p < .001$ であり、有意であった。さらに類型第一グループについて、その後の検定: Tukeyを行ったところ、 $F(4, 271) = 0.961$ 、 $p < .429$ であり、有意差は認められなかった。検出されたサブグループは3つであり、2016年度調査対象グループは、すべて第3サブグループであった。グループ間における基本的自尊感情に関する平均得点を検出し、分散分析を行った。その結果、 $F(8, 541) = 23.858$ 、 $p < .001$ であり、有意であった。検出されたサブグループは2つであり、2016年調査グループは、すべて第1サブグループであった。グループ間における社会的自尊感情に関する平均得点を検出し、分散分析を行った。その結果、 $F(8, 541) = 5.338$ 、 $p < .001$ であり、有意であった。検出されたサブグループは、3つであり、グループ6と8以外は、第1グループであった。

同一の学生であるグループ1とグループ6を比較してみると、次のような変化が認められた。

- SBタイプの割合 : 60.0% \Rightarrow 87.2%
- 社会的側面 (S-se) : 14.96 \Rightarrow 17.23
(6項目、満点=24)
- 基本的側面 (B-se) : 12.66 \Rightarrow 16.21
(7項目、満点=28)

なお、SとBを測定する項目は、次の通りである。

- S項目 1) ほとんどの友だちに、好かれていると思う。2) 運動は得意なほうだと思う。3) 他の人より、頭が悪いと思う。4) 他の人より、運動が下手だと思う。5) 友だちが少ないと思う。6) ほかに人より、勉強がよくできると思う。

- B項目 1) 自然は大切だと思う。2) 自分は生きていていいのだ、と思う。3) 何かで失敗したとき、自分はダメだなと思う。4) 自分はこのままではいけない、と思う。5) 自分には、良いところも悪いところもあると思う。6) ときどき、自分はだめだなと思う。7) 生まれてきてよかったと思う。

表5 SE タイプと G5~9

	G 5	G 6	G 7	G 8	G 9	合計
回答数	57	36	32	78	69	272
SBタイプ %	21.0%	13.2%	11.8%	28.7%	25.4%	100.0%
総和の%	19.2%	12.1%	10.8%	26.3%	23.2%	91.6%
回答数	1	1	0	0	0	2
Sbタイプ %	50.0%	50.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
総和の%	.3%	.3%	.0%	.0%	.0%	.7%
回答数	2	1	4	7	9	23
sBタイプ %	8.7%	4.3%	17.4%	30.4%	39.1%	100.0%
総和の%	.7%	.3%	1.3%	2.4%	3.0%	7.7%
回答数	60	38	36	85	78	297
合計 %	20.2%	12.8%	12.1%	28.6%	26.3%	100.0%
総和の%	20.2%	12.8%	12.1%	28.6%	26.3%	100.0%

Pearsonの χ^2 検定における漸近有意確率(両側)は、0.309であり、統計学上の有意差は認められず、2変数間に関連がないことが支持された。グループ間で類型の出現率に差がないと認められる。

近藤によるSEタイプの得点のイメージは、図1のとおりである。近藤によれば、大きく4つのSEタイプに類型化でき、次に示すような類型ごとの特徴が説明されている。

- SBタイプ = 自尊感情の2つの部分がバランスよく形成されている
- sBタイプ = 社会的自尊感情が育っていない: のんびり屋、マイペース
- sbタイプ = 自尊感情の2つの部分が両方とも育っていない: 孤独、自信がない
- Sbタイプ = 社会的自尊感情が肥大化している: 頑張り屋の良い子、不安を抱えている

Pearsonの χ^2 検定の漸近有意確率(両側)は、0.086であり、2変数間(性別)に統計学上の関連がないことが支持された。性別によるSEタイプの有意な差は認められない。

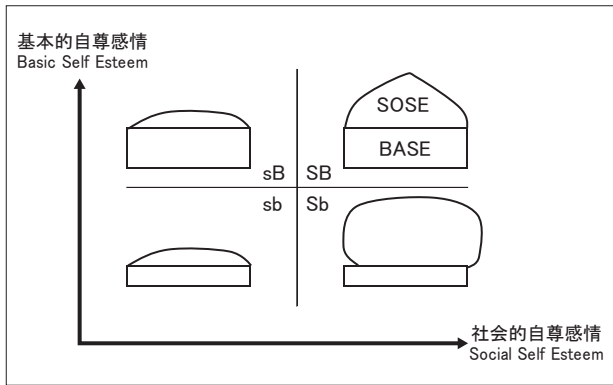


図1 近藤によるSEタイプのイメージ。

表6 SEタイプと性別

		男性	女性	合計
SBタイプ	回答数	42	228	270
	%	15.6%	84.4%	100.0%
	総和の%	14.2%	77.3%	91.5%
Sbタイプ	回答数	1	1	2
	%	50.0%	50.0%	100.0%
	総和の%	.3%	.3%	.7%
sBタイプ	回答数	7	16	23
	%	30.4%	69.6%	100.0%
	総和の%	2.4%	5.4%	7.8%
合計	回答数	50	245	295
	%	16.9%	83.1%	100.0%
	総和の%	16.9%	83.1%	100.0%

表7 SEタイプと学習量

		SB	sB	合計
6時間以上	回答数	2	0	2
	%	100.0%	.0%	100.0%
	総和の%	.7%	.0%	.7%
4時間程度	回答数	1	0	1
	%	100.0%	.0%	100.0%
	総和の%	.3%	.0%	.3%
3時間程度	回答数	2	2	4
	%	50.0%	50.0%	100.0%
	総和の%	.7%	.7%	1.4%
2時間程度	回答数	19	1	20
	%	95.0%	5.0%	100.0%
	総和の%	6.5%	.3%	6.8%
1時間程度	回答数	58	8	66
	%	87.9%	12.1%	100.0%
	総和の%	19.8%	2.7%	22.5%
30分程度	回答数	65	6	71
	%	91.5%	8.5%	100.0%
	総和の%	22.2%	2.0%	24.2%
ほとんどしない	回答数	121	6	127
	%	95.3%	4.7%	100.0%
	総和の%	41.3%	2.0%	43.3%
NA	回答数	2	0	2
	%	100.0%	.0%	100.0%
	総和の%	.7%	.0%	.7%
合計	回答数	270	23	293
	%	92.2%	7.8%	100.0%
	総和の%	92.2%	7.8%	100.0%

Pearsonの χ^2 検定の結果、漸近有意確率(両側)は、0.053であり、2変数間(学習量とSE類型)に関連がないことが支持された。しかし、数字をみる限り、わずかな誤差・誤算であり、筆者の感覚とも一致しなかった。そこでグループごとの学習量の平均(単位:時間/日)を確認すると、表7のとおりであった。分散分析のF検定を実施したところ、1%水準で有意差が認められ、所属するグループによって、学習量に相違があることが認められた(表8)。さらに、その後の検定:Tukeyで多重比較を行ったところ、「G5とG7」「G5とG8」間で平均値の差が認められたが、グループサイズが等しくなく、有意水準を保証することが出来なかった。

表8 グループの平均学習量

グループ	平均値	回答者数	標準偏差
G 5	2.59	59	1.328
G 6	1.89	36	1.141
G 7	1.86	35	1.089
G 8	1.72	85	1.191
G 9	2.01	78	.947
合計	2.01	293	1.178

$F(4,272) = 5.096, P < .001$

以上のことから、SE類型に関して、グループ5~9は等質性が高い傾向にあると判断した。次にグループ5~9を同一グループとして、SBタイプとsBタイプの学生像を明らかにするため、社会人基礎力に関する認識を調べた(表9)。その結果、社会人基礎力=11項目のうち、主体性、実行力、計画力、柔軟性、規律性の5項目において、SBタイプとsBタイプ間で有意な差が認められた。社会人基礎力11項目について、Pearsonの相関係数を求めたところ、SBタイプの学生は、すべての項目に相関を認めた。一方で、sBタイプの学生は、表10に示したように約半数の項目で、相関を認識できずにいた。

IV. 考察

2016年度調査と2019年度調査とで、どちらも近藤のSOBA-set尺度を用いて、学生のSEについて調査した。比較が可能であったグループ1と6においては、前回調査に比べ今回調査では、SBタイプの学生が大幅に増加していた。考えられる変化の要因として、1. 時間の経過、2. 学習量、3. 選抜試験

表9 社会人基礎力とSE 類型

タイプによる差	前に踏み出す力 (アクション)			考え抜く力 (シンキング)			チームで働く力 (チームワーク)					ストレス・ コーピング
	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	
平均値	1.90	2.24	1.81	1.84	1.88	2.01	1.84	1.78	1.83	1.85	1.86	2.14
S B 回答者数	269	269	269	269	269	270	269	269	270	269	269	269
標準偏差	.636	.662	.645	.641	.629	.662	.637	.637	.674	.592	.685	.763
平均値	1.43	1.96	1.48	1.61	1.43	1.70	1.30	1.26	1.43	1.61	1.52	2.09
s B 回答者数	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
標準偏差	.590	.767	.511	.722	.590	.635	.559	.449	.507	.583	.665	.900
平均値	1.86	2.22	1.78	1.82	1.85	1.99	1.79	1.74	1.80	1.83	1.84	2.13
合計 回答者数	292	292	292	292	292	293	292	292	293	292	292	292
標準偏差	.644	.673	.641	.649	.637	.665	.647	.639	.670	.594	.689	.773
p 値	.001	.051	.017	.101	.001	.027	.000	.000	.006	.060	.023	.764

表10 sB タイプの社会人基礎力に関する認識

主体性	1											
働きかけ力	.752**	1										
実行力	.679**	.652**	1									
課題発見力	.198	.154	.523**	1								
計画力	.359	.281	.644**	.546**	1							
創造力	-.085	-.087	.018	-.113	.059	1						
発信力	.432*	.342	.593**	.333	.677**	-.013	1					
傾聴力	.189	.238	.521**	.231	.611**	.180	.639**	1				
柔軟性	.463*	.168	.407*	.326	.422*	.049	.599**	.430*	1			
状況把握力	.301	.288	.585**	.767**	.493*	.248	.372	.403*	.568**	1		
規律性	.316	.334	.244	.198	.359	.118	.532**	.189	.267	.188	1	
ストコンカ	.488*	.540**	.466**	.311	.245	.047	.523**	.244	.273	.380	.699**	1
	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	
	前に踏み出す力 (アクション)			考え抜く力 (シンキング)			チームで働く力 (チームワーク)					

や単位取得試験、4. 社会活動経験、5. 人間としての成長、6. その他が考えられる。しかしながら、これら进行分析のためのデータは得られておらず、本研究の課題である。

2019年度調査の対象学生は、表2の結果が示すとおり、女性が多く高校3年生の前期に在籍する大学タイプを選択し、同大学タイプの志望順位は高い傾向にあり、同大学タイプでの学びを「関心のある分野」と思い、年長者の「勧め」でそれを選んでいる。こうした学生でかつ、近藤のSOBA-set 尺度で、9割以上がSBタイプと判定でき、基本的SE + 社会的SE がともにバランスよく形成されている学生たちであった。その他の学生(約1割)は、sBタイプに類型化された。このことから、今回の調査に参加した学生たちは、基本的SE と社会的SE がバランスよく形成・獲得されてきた自己肯定感や自尊感情の高い学生たちであった。この傾向は、現在所属している大学タイプとは関係なく、自分と向き合う

力として表出されていると考えられる。つまり、本研究の仮説として提示した、大学タイプごとに学生の実態としてのSE が異なるために、学生への教育的配慮を異なるものに工夫していかなければならないという考え方が否定される可能性が見出された。そこで表4に示したとおり、SE 類型を分解し、基本的SE と社会的SE に区分してみると、後者においてバラツキが認められ、グループ間の平均の差を検定してみると、そこに有意差が認められた。つまり、等質性を持つグループでありながら、社会的SE においては異質性が認められた。すなわち、今回の調査に回答した学生たちは、総合的にみた場合、SE の高い学生であり、かつ基本的SE も高かった。その一方で、社会的SE にはバラツキがあり、社会的側面に着目し、さらに詳しく検証していくべき課題が見出された。

2019年度調査の対象者を「SBタイプとsBタイプ」で検討してみると、第1に学習量に違いが認め

られた。また、タイプとは別に、調査対象グループ内でも、学習量に相違があることが確認できた。SEタイプが同じであっても、学習量に着目すると、学生の指導の指標が確認できる可能性がある。次に、「SBタイプとsBタイプ」の社会人基礎力に関する認識を確認したところ、いくつかの項目でタイプ間の平均値の差異が有意に認められた。タイプごとに社会人基礎力に関する各項目の相関係数（関連づけ度合い）を測定したところ、SBタイプは、すべての項目間で関連づけ度合いが有意に高く認められた。一方で、sBタイプでは関連づけを認められない項目が約半数に及んだ。S（社会的SE）の得点を伸ばすためには、社会人基礎力間の関連づけを意識化させていく教育が必要であることが示唆された。

V. 結論

今回の調査では、調査に回答した学生たちは自らが所属する大学タイプが異なっていようと、同様にSEが高く、基礎的SEが形成されており、筆者ら教員が日常的に学生に接しながら感じている「自己肯定感が低く、授業に積極的に反応せず、社会に出てから大丈夫だろうか」という見立てとは異なる学生像が把握された。すなわち、学生たちは自らの現在の状況を肯定的に受け止め、自尊感情が高く、プライドを持っていると考えられた。こうした傾向を踏まえて、筆者ら高等教育を行う者は、教育的配慮をしていく必要があるだろう。

もう一点、社会的SEについてはバラツキが認められた。このことに着目すると、第一に大学4年間で学習面を強化し、得点力をアップさせることにより、学生の社会的SEが上昇する可能性が高い。その傾向は、表3・4で示した「グループ1と6」で確認でき、高偏差値を基礎として大学に入学してきた学生より、低偏差値を基礎としている学生の方が顕著であろう。いわゆる「伸びしろ」が機能していると考えられる。第二に「SBタイプとsBタイプ」の学生間の相違点を探索した結果で認められるように、s（社会的側面）を伸ばすためには、sにかかる力量要素を構造的・体系的に理解させ、体験学習を、共有させていくことが有効である可能性が示唆された。先行研究が示しているようにSEは、自分

自身に向き合うこと、他者との関係において形成されること、社会と社会生活上との関係に関わることで構成され、自己実現とも関連する。したがって、低偏差値を基礎としている学生ほど、結果が出せる学習の機会を与え、sにかかる力量要素を構造的・体系的に体験学習させることが求められるといえよう。その意味でも、学生の社会的SEを把握し、学生たちが、結果が出せる仕組みとしての学習時間の増加や構造的・体系的な実習等の学習がますます重要になろう。

おわりに

今回調査では、一部の学生に対してコーホート調査形式をとったが、調査の精度に不十分さがあり、十分な調査結果が得られなかった。また、学生たちが自覚しているSEにおける社会的SEと学びの成果について、結果が等質性を示した背景や要因の探索もデータからは不十分であり、今後の課題を残した。

引用文献

- Albert, Bandura (1977), "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change". *Psychological Review*. 84(2), 191-215
- 遠藤恭子、米澤弘恵、石綿啓子、他(2011)「看護学生自己教育力と精神的健康との関係」『獨協医科大学看護学部紀要』5(2)、35-50
- 橋本健夫(2019)「大学に求められる組織としての教育力－国際社会に開かれ、未来を創る大学の実現－」『大学教育学会誌』41(1)、1
- 国立教育政策研究所(2015)『生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも、「自己有用感」？』Leaf.18
- 近藤卓(2014)『基本的自尊感情を育てるいのちの教育－共有体験を軸にした理論と実践』金子書房
- 宮堀真澄、鈴木圭子、三浦正樹、他(2002)「介護福祉系学生の自己教育力に関する研究」『日本赤十字秋田短期大学紀要』7、15-21
- 宮嶋淳(2008)「社会福祉系学生の生活体験・学習活動・生活に関する一考察」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』9、89-98
- 宮嶋淳、名倉弘美、山下科子、他(2017)「学生の自

- 己肯定感の向上に関する研究－A学部における
悉皆調査の結果より－」『人間福祉学会誌』17
(2)、31-9
- 宮崎里美(2015)「人間としての生き方について生徒
一人一人が自覚を深め、自他を肯定できる心を
育てる新たな道徳教育へのチャレンジ～自己肯
定感、自己有用感を得た平方プライドの育成～」
『教育研究所紀要』24、29-53
- 日本セルフエスティーム普及協会(2019)「自己肯
定感とは」([https://www.self-esteem.or.jp/
selfesteem/](https://www.self-esteem.or.jp/selfesteem/)) 2019年8月1日検索
- 西野泰代(2013)「感情コンピテンスとセルフエスチー
ムの関連」『広島修大論集』54(1)、93-107
- 高儀郁美、山本澄子、矢野芳美、他(2015)「看護系
大学生における自尊感情の実態：SOBA SET を
用いて」『北海道文教大学研究紀要』39、31-37
- 多久島寛孝、山本勝則、弓掛和恵、他(2006)「自己
教育力に影響を及ぼす要因の分析」『保健科学
研究誌』3、49-60
- 内田知宏、上埜高志(2010)「Rosenberg 自尊感情尺
度の信頼性および妥当性の検討－Mimura &
Griffiths 訳の日本語版を用いて－」『東北大学
大学院教育学研究科研究年報』58(2)、257-266
- 山本正(2015)「中学校におけるセルフ・エスチー
ムを育む教育の実践とその成果」『環太平洋大
学研究紀要』9、215-222
- 横嶋敬行、賀屋育子、内田香奈子、他(2019)「児童
用の簡易版セルフ・エスティーム(SE)潜在連
合テストの開発の構想－自律的ならびに他律的
SEを同時に測定する、紙筆版とタブレット
PC版の測定法開発に関する理論－」『鳴門教
育大学学校教育研究紀要』33、141-148